

兄と弟に会う旅

山田 弘子

6月23日から4泊5日の『中国・日本人公募への旅』に参加した。私の出生地でもあり、兄と弟が埋葬されている場所でもあるハルピン訪問は、かねてからの念願であった。

初日は方正県政府を表敬訪問した後、日本人公募へ向かった。しっかり施錠され、管理人もいるという友好園林の入り口に立った時は、中国政府の手でしっかり守られているという印象を受けた。中はゆったりとした広さで、とても落ち着いた場所である。公墓をぐるりと守るように植えられた松の木の間からチラチラとこぼれる木漏れ日が、私たちの訪問を喜んでくれているようであった。日本から持参した森永ミルクキャラメルの小箱を供え、手を合わせる。飢えと寒さと病と、絶望の思いを抱えたまま息絶えた、ここに眠る多くの人たち。キャラメル一粒の甘みをどれほど欲したであろうか、そんなことを思っていたら、目の奥が熱くなった。苦しみから解放され、母国ではないけれども第2の故郷でやっと安らげる時を迎えられたのだと思う。「どうぞ安らかに眠りください」と祈らずにはいられない。

■カプセルの恐怖

この日は方正のホテルに宿泊。方正の「五つ星」(?)だとか。少しユニークな五つ星。各部屋のオートロックのドアは、カードキイはあるのだが、出入りのたび女性サービス員に開けてもらわないと難しいのだとか。

洗面所をのぞくと、一角に、いかにも後からつけたような、カプセルみたいなシャワールームがついている。さっそく汗を流そうと入ってみたが、カプセルの正面と右横にコックがついているが、どう回してもひねっても、お湯も水も出ない。いろいろいじっているうちに水が出てきた。汗ばむ一日だったので、水でもいいと思って中に入った。こんどは水が止まらない。困った。仕方なくいったん出てバスタオルを羽織り、もう一度いじってみたら、なんと上から横から一斉に水がジャー!! そしてやっと止まった。やれやれと思って足元を見ると、洗面所が水であふれてしまった。そのカプセルルームからは水が流れるようになっているというのを後で知ったのだが、その時はもう泣きそうで、下の階に漏れては大変と、今度は排水処理に必死で、大汗をかいてしまった。夕食の時にその話をしたら皆に笑われた。

■弟が眠る寺

「ハルピン北方、極楽寺裏手の日本人共同墓地」父が書き残した、弟の埋葬された場所である。今回、私が方正訪問のツアー「中国・日本人公募への旅」に参加したのは、公墓訪問とともに、65年前、相次いで亡くなった私の兄と弟を弔うためでもあった。方正からハルピンに戻った翌6月26日、弟が眠る場所を訪ねた。ハルピン北方「極楽寺」、さら

びやかだが荘厳な感じのする大きなお寺だった。

いくつもの門を左手に見ながら、広い通りを歩いて行くと、寺の終わりあたりに遊園地の入り口がある。中に入って間もなく、その一角はきれいに手入れされた一面の芝生で、夏のような暑い陽が降り注いでいた。この芝生の下に、当時1歳半で亡くなった弟が、そして多くの日本人が眠っているのか。通訳の王さんの話によると、

「ここは昔、お墓があって、とても寂しい場所でした。この奥のロシア人のお墓は今もありますよ」

ということだった。目を上げると植込みの奥は遊園地になっているようで、観覧車が見え、賑やかな歓声が響いていた。私は日本から持参した水と線香を供え、手を合わせた。真ん中の私を挟んで兄と弟が相次いでこの地で亡くなって自分だけが日本に帰れた。私は涙もぬぐわず、その場で立ちつくしていた。

当時、私の兄弟は枕を並べて寝ていて、昭和21年4月に弟が肺炎で亡くなった時、兄（当時8歳）は「今度は僕の番だね」と言ったそうだ。その3か月後には、兄もこの世を去った。弟がここ極楽寺に埋葬されたことは父が残した記録で確定できたが、その3か月後に息を引き取った兄の遺体がどこでどう葬られたのかについて父は「ハルピン東方、日本人共同墓地」としか記録していない。その頃は、ハルピンに集結していた避難民の帰国計画が動き出し、父はその仕事に忙殺されていたさ中だったため、「わが子の死を悲しんでいる余裕もなかった」と書き残している。ハルピンの現地に立ちながら兄の埋葬場所の特定ができない。しかし兄は、私がこの地を訪れたことで理解してくれていると思う。「日本人共同墓地」とあるので、兄ばかりではなく、大勢の日本人が埋葬されていると思う。その場所は、せめて弟が埋葬されていた芝生地のものであって欲しい、と願いながら心の中で手を合わせた。

■ 弔いの旅を終えて

亡き子を残して引き揚げざるをえなかった両親の思い、そしてまた自分一人だけ引き揚げてこられて、兄と弟から命をもらっていると思えてならない昨今の私、そんな思いを抱いて訪れた今回のハルピンへの旅。この日は訪問4日目の、今年一番という暑い日だった。

私たち家族が約7年間過ごしたハルピン。父が活躍した松花江流域、伊漢通船着き場跡地、そして弟の埋葬場所等など、充実した4泊5日の旅であったと思う。

兄と弟の死がなければ、当時4歳の私も残留孤児になっていたかもしれないと思えば、立場こそ違え、「方正地区日本人公募」として他人事とは思えない。

様々な思いで今回は自分なりの弔いの旅になった。

同行の皆さん、ありがとうございました。

（やまだ・ひろこ：埼玉県越谷市在住。1942年、旧満州で生まれる。敗戦で一家5人、ハルピンで帰国を待つうち、弟、兄を亡くす。結婚後、二人の娘を出産、父が波乱に富んだ95年の生涯を閉じたあと、悲願だった「兄と弟の供養」に、今年6月方正への旅に参加）